

『ダニエル・デロンダ』グエンドレン物語： キリスト教の遺産と科学の和解

福永 信哲

The present paper aims at making clear how George Eliot attempted a reconciliation between Christian world's view and scientific rationalism. If we focus our attention to the text of Gwendolen, the heroine's matrimonial tragedy in *Daniel Deronda*, we become aware that the author's own view of human depravity is graphically illustrated through her insightful portrayal of the heroine's death in life in her marital impasse. The readers are invited to participate in the process of Gwendolen's youthful belief in free will turning into a bitter disappointment and disillusionment with life's reality. We recognize in this drama a plot of the protagonist's dawning sense of law through her suffering and sorrow. Thus we are shown into the inner mechanism of the heroine's conscience being forged by the tragedy. The textual analysis illuminates that the discourse of the heroine's inner drama is rich in imaginative power owing to a complex interweaving of traditional Christian phraseology and scientific one.

Keywords : 科学, キリスト教, 恐れ, 自己放棄, 良心, 生理学・心理学

序 グエンドレン：自己執着を超える道

『ダニエル・デロンダ』(*Daniel Deronda* 1875-76) (以下, *DD*と略称) のヒロイン・グエンドレン(Gwendolen) の物語でジョージ・エリオット(George Eliot 1819-80) が探求しようとしたテーマを煎じ詰めていけば, 作家自身が自らの人生体験から得た自由観の深化といえるかもしれない。すなわち, 己の自由意志の赴くままにふるまう自由が現実の厚い壁にぶつかり挫折するということである。試練に伴う苦しみと恐れを糧に自己を捨てて, 現実があるがままに直視し, 受容する。そして, 機を転じたところに開かれてくる心の自由のなかに, より高度な宗教的自由を観るということである。

グエンドレンの結婚生活を中心とする悲劇は, イギリス小説の最良の伝統である性格研究の徹底性において, エリオットの性格描写の総決算といつてよいものである。彼女の創造した登場人物の中で, これほど自我の動きが精細に, 時間的な幅をもって捉えられている例は稀有である。生来の強い自我と健

康な肉体からくるエロスの官能性ゆえに, 横溢する生の衝動が周囲の人々に波紋を広げ, 軋轢を招くのである。その一方で, 彼女の繊細な感受性は自己の奥深い部分に闇を抱えている。生の衝動とは表裏一体の不安と恐れが潜む闇である。みずから正体を掴めない伏魔殿があることにおのきながら, これに目をそむけ, 楽しみにばかり目を向けている。だが, 喜びを追い求めれば求めるほど, 人生の罨にはまって不安と恐れが昂じてくる。一家の経済的破綻による行き詰まりを打開しようと, 打算的な動機で結婚に踏み切る。その結婚が蟻地獄のように彼女の「自由」の足許をすくうのだ。

人生の見掛けと実態の大きな落差にまどい苦しむグエンドレンの内面描写には, エリオットの最良の人間洞察が生きている。語り手の背後に隠れている作家は, 苦悩の闇をさまようグエンドレンの生き方に一縷の純な魂が宿っていることを見逃していない。これが自己の苦しみの所以を模索する眼となって生きてくる。それが機縁となって, *DD*のもう一方の主

人公デロンダが、リーヴィス (Leavis) のいう「世俗の聴罪司祭」(lay confessor) (101) として彼女の自己発見の導き手となる。ジェイムズ (James) は、グエンドレンの、苦しみから悔い改め、贖いへと至る心理的プロセスに作家の良心観の精髓を見ている。彼によれば、グエンドレンの良心が悲劇を作ったのではなく、悲劇が良心を錬成したのである。良心が磨きあげられてゆくプロセスそのものに作家の力量がこめられているという。(George Eliot: *The Critical Heritage* 431) これはグエンドレン物語を貫くテーマを直感した洞察的な指摘である。

では、良心が成長してゆく基となる種子は何であろうか。それは未熟な自我が成長して真の自己に出会うまでには避けることができない恐れと自己不信である。グエンドレンの性格像が人間の普遍的問題に触れているとすれば、それは誰も免れえない自我の不安を徹底的に凝視しぬいたところにある。これが個人生活のあらゆる側面で、微妙で奥深い役割を果たす相を実際の眼で捉えようとしたところに、この物語の真骨頂がある。エリオットにとって、自我の不安という問題は一身上の重大事であった。眼を逸らそうにも逸らすことがかなわぬ宿命的な問題であった。おのれの生を生きるということは、自我の不安を直視しぬくということと同義であったとさえいえるのだ。『急進主義者フィーリックス・ハウルト』(*Felix Holt the Radical* 1866) のトランサム夫人 (Mrs Transome), 『ミドルマーチ』(*Middlemarch* 1871-72) (以下、MMと略称) のカソーボン (Casaubon), バルストロード (Bulstrode) などに見られる痛ましいまでの自我の不安、葛藤の真に迫った描写は、作家自身の内奥の問題意識から発しているからにはほかならない。グエンドレンの象徴するテーマは、本質的に彼らの延長線上にある。ここにエリオットの精神遍歴が色濃く投影していることは、その射貫くような性格描写の文体から推察される。¹

本論ではグエンドレン物語のディスコース (系統だった意味を内包する談話) を取り上げ、具体的な文脈に置いてその文体的特徴を明らかにする。そこに、ダーウィニズムに起源をもつ生理学・心理学の見方とキリスト教の遺産がせめぎあっているさまが見てとれる。これをテキストの言語事実から裏づけてゆく。

I. 仮説・検証のプロセスとしてのプロット

ビア (Beer) によれば、19世紀後半に至って小説の語り手は、神のごとき全知・全能の役割に代えて、科学者が探求し、仮説を立て、検証するのに類似した方法の実践者として立ち現れた。MM

ではテキストの科学的・医学的関心は、テーマ、人物描写、その価値観ばかりでなく、作品の構造そのものにまで浸透しているという。(149) DDでも科学的方法論がテキストのあらゆる側面にそっと生かされている。グエンドレンの悲劇とデロンダによる導きと魂の再生のプロットにも、科学的知見に裏づけられた生理学・心理学の語彙と発想が宗教的なそれと相克している。人が試練に遭い、苦しむ体験そのもののなかに人間性が変わる契機があるとみる聖書的な見方がグエンドレンの悲劇を貫いている。同時に、この道理を生理学・心理学の洞察によって裏づける語り手のまなざしと語彙は、語りの技法のなかに生きている。これを跡づける前に、グエンドレン物語の輪郭を眺めてみよう。

グエンドレンの悲劇は、西インド諸島の植民者たる義父の事業の破産と経済的困窮、さらには、これを契機に、一家が身を寄せた国教会牧師ガスコイン (Gascoigne) 家の経済的不如意によって自立を迫られたことをきっかけにしている。これによって彼女は乳母日傘の安逸な境遇から、一転して浮世の厳しい現実と直面せねばならなくなったのである。いざそうなってみると、自己のあり方が、現実の圧力によって情け容赦なく問われてくるのを自覚させられるのだ。彼女の慣れ親しんだぬるま湯的な階級意識は、こう囁くのだ。レディとジェントルマンは、好きなことをするだけでよい、世間は私に厳しいことを要求する訳ではない、と。すべてがこんな具合に興味程度ですむアマチュアリズムの世界である。世間の表面的敬意で護られて、自尊心は常に安泰なのだ。こうした上流階級の文化的微温主義は、グエンドレンの性格の奥深くに定着した習性なのである。これは、ものを考える前に反応するほどの皮膚感覚といってよい。彼女のなかのこの感覚が、変化した現実を前にしても反射的に反応してしまうのだ。経済的自立のための背に腹はかえられぬ措置として、伯父ガスコインから提案された貴顕の家 (司教一家) の令嬢の家庭教師 (ガバネス) として働く話や、コテージに仮住まいさせてもらう話 (21章) などは、彼女からみれば、自分の存在理由を根本から否定されるような痛みを伴っていた。階級的自尊心が感情のしこりとなって、ものの道理を聞き分けることがどうにもできないのである。自分の固定観念を捨て去って、ものごとをあるがままに見るということは、さほどに困難な行為なのだ。

グエンドレンが人間的共感の共通基盤もないままに、ジェントルマンのグランドコート (Grandcourt) との結婚に突き進んでしまった背景にも、この自尊心が深くかかわっている。自らをひとかどの人間と

考える抜きがたい気位の高さが、自分を取り巻く窮状を直視し、これに対処する虚心な柔軟心の芽生えを摘みとってしまうのだ。結婚の話が具体化すると、彼女にそっと耳打ちされた、夫となる人の秘密の妻子の存在が心に懸かって不安にさいなまれていた。(14章)だが、自分の体面は無傷なままに、窮状だけは一気に解決する夢想的な思惑がこの執拗な不安に打ち勝って、彼女を結婚へと突き動かしたのである。実はそこにこそ人間グランドコートの本質的な問題が孕まれていたのであるが、夢想や打算に曇らされた眼には、この道理が見えないのである。

いざ結婚生活を始めたグエンドレンを待っていたものは、伴侶との愛も共感もない暮らしであった。表層だけが華やかな慣習の世界に入ってみると、そこに彼女の生き甲斐となるべきはずの心の絆はなかったのである。そこには自我と自我の暗闘の荒涼たる世界があった。力による支配と被支配の見えざる無法地帯があった。(35章)よるべのない母親と姉妹に金銭的温情を掛けてくれた夫に、彼女はもはや対抗する基盤がない無力を味わったのである。国教会の宗教的共同体の守護者たるべき夫と妻の間に責任感の共有意識はなく、礼拝をはじめとする儀式典礼は社交の場としての表層的意味あいこそあれ、型通りに儀式に従う形式主義があるのみであった。そこには心を疲弊させる義務感があるのみで、湧き上がるような自己放棄の喜びと同朋意識はなかった。(48章)

グエンドレンの心の地獄を直感して、終始見つけていたのがデロンダであった。宗教的感受性と共感の深い彼は、迷いと苦しみのさなかにある彼女のあるがままの姿に憐れみを禁じ得なかったのである。自然ななりゆきとして、二人の間には真の言葉のやりとりと魂の触れ合いがあったのである。そのみがグエンドレンを生き地獄から救い出す所以であった。

II. グエンドレンの変容：因果の連鎖としてのプロット

「人格はプロセスであり、変化発展する。」“for character is a process and an unfolding.” (MM 15:166)² MM 15章で医師リドゲート (Lydgate) の過去から現在に至る来歴を語る語り手のコメントである。MMでは、人間を変化発展するプロセスとみる見方は、作品の構造のなかに消化されきっている。この観点はDDにも引き継がれている。それが典型的に表れているのが、グエンドレンの自己発見に至る性格描写である。彼女の20歳から22歳に至る人生の節目は、独身の夢見る暮らしから結婚の現実によって幻想から覚醒する体験への歩みである。その

道程がそのままプロットに結実している。語り手の背後にいる作家は、苦しみを種にして人生の道理に気づいてゆくヒロインの変化のプロセスを凝視している。この道理をエリオットは、「自然界と精神界に働く不変の法則、普遍的因果律」“*undeviating law in the material and moral world — of that invariability of sequence*” (R. W. Mackay's *The Progress of Intellect* 21) と呼び、これを読者にありありと見せることが彼女の小説作法の基盤となったのである。

独身時代のグエンドレンが現実の試練を薄々予感しながら、「利己的欲求の生得的エネルギー」に動かされてこれに背を向ける場面がある。語り手は彼女のいわれなき楽観主義に自己への無知を見ている。

In the schoolroom her [Gwendolen's] quick mind had taken readily that strong starch of unexplained rules and disconnected facts which saves ignorance from any painful sense of limpness; and what remained of all things knowable, she was conscious of being sufficiently acquainted with through novels, plays, and poems. (4: 34)

語り手の円熟した人生智とヒロインのやみくもなエネルギーのギャップがピリッとした風刺画を描いている。暗喩の陰影に富んだ文彩は背後に作家の洞察を秘めている。命の営みは神秘に満ちている。神秘の闇を手探りすると、無限の真理が隠れている。これが円熟期の作家の「有機的生命観」(organicism)である。語り手の言葉の選択はそこに由来している。“that strong starch of unexplained rules and disconnected facts”は、知識が背後に広がる真理の奥行から遮断され、断片化・固定化していることを暗示している。知識が生きる知恵として働いていないことに無力 (limp) 感を感じる感受性がないのである。“what remained of all things knowable”は、知識がお飾りのごとくあてがわれるのに満足して、ものを問う心が欠けている若者の無教養を思わせる。小説やドラマや詩を読めば教養が身に着くと信じて疑わない。ちょっとした点描にもこうしたイメージの言語が駆使されているのは、エリオット後期小説の特徴である。これが人物の人間性の隠れた問題を浮き彫りにするのだ。

行き詰まりの打開策を模索するグエンドレンが自分の置かれた立場を思い知ったのは、自活の道求めて音楽教師クレスマーの忠告を求めに赴いた折であった。彼は、東欧系ユダヤ人としての人種上の負

い目を背負いつつ精進を重ねて、優れた芸境を磨きあげたのである。血のにじむような刻苦勉励により、イギリス上流階級の間でピアニストとしての力量を認められるようになった人物である。彼の眼には、女優兼歌手として自立することを夢見て自分を頼ってきたグエンドレンの未熟な楽観主義はあまっちょろい少女趣味と映った。そのお嬢様的な感覚の弱点を鋭く見抜くと、気難しい芸術家魂がわれ知らずこみあげてくる。いわく、「深窓の令嬢のたしなみと本物の芸術は違うものだよ。もし君が本物の芸術を志すつもりなら、身に着いたサロン風の生半可な基準を捨てることが先決だよ。芸の道は退路を断って全身全霊で精進する一筋の道なのだよ。絶えず仮借ない眼で評価され、己の未熟さを自覚させられる世界だよ。数知れぬ屈辱、挫折を乗り越えてなお黙々と自己を磨く営みなのだよ。それだけの労苦を費やしたからといって、世間の評価と生活の糧が保障されるわけでもない。もし君がこれほどの困難に堪えて献身すれば、高い志からおのずと漂い出る風格も備わってくるだろう。たとえ名声を得なくても、払った犠牲ゆえに君の内面から輝き出る人間性こそが芸術の命なのだ。謙遜な心で高い境地に至らんとする、その過程が大切なのであって、名声は追い求めるものではないよ。率直に言って、君は凡庸以上のものになれる可能性はないのだよ。」(23: 240)

こう語るクレスマーの厳しい言葉は、この道の辛酸をなめ尽くした彼の生活体験から出たものである。グエンドレンの無知な楽観主義にたいする憐憫の情は、彼女の心に届いたのだ。真心のこもった言葉は相手の心の機微に触れずにはおかない。彼女の自尊心が抗弁しようにもできない人生の道理に触れているからである。これを聞く人の耳には、自己のあり方を根底から揺さぶる力がこもっていたのだ。ヒロインの行き詰まりをたどる作家の俯瞰図的な眼は、彼女の痛みの自覚に脱皮を促す道徳的感受性の萌芽をみている。しかし、この期に及んでなお、グエンドレンは生体解剖の痛みに堪えかねて、グランドコートとの結婚という、現状のままの自己が許される世界に避難する。だがここにもまた、自己のあり方が厳しく問い直される試練が待っていた。作家の注意は絶えず、ヒロインが包囲され、これに触発されて洩々自己の真の問題を直視させられてゆくメカニズムに注がれている。

グエンドレンに語りかけるクレスマーの言葉には作家自身の芸境が反映していることが窺われる。因習的社会の自己満足の風を部外者の眼で解剖する作家の意図は、デロンダの性格像にその一端が表現されている。その一方で、作家自身のヨーロッパ的視

野はユダヤ人芸術家のまなざしに仮託されている。これは、クレスマーの言葉に、エリオットの有機的生命観から直接ほとばしったような語句が頻出することから察せられる。彼は真の芸術家の人生についていう。

... it [the life of the true artist] is out of the reach of any but choice organizations — natures framed to love perfection and to labour for it; ready, like all true lovers, to endure, to wait, to say, I am not yet worthy, but she — Art, my mistress — is worthy, and I will live to merit her. . . . the honour comes from the inward vocation and the hard-won achievement: there is no honour in donning the life as a livery. (23: 236)

“choice organizations — natures framed to love perfection and to labour for it;” この文脈で使われる「組織」と「本性」は芸術家の心と肉体もろとも境地を暗示している。心、技、体の調和が取れた状態である。「完成」を目指して労苦をいとわない一筋の道である。“Art, my mistress” は、芸術への精進が自己を捨てることにあることを示唆している。おのれより価値あるものを愛することによって、人は自由を得るのである。そこに一脈のエロスが混じっていることは“mistress” が暗示している。“the inward vocation” は、生活そのものが高い目標の実現に適うよう整えられるさまを示している。これによって人は安らかな境地を体得する。「人生を仕着せのようにまとって」も、生活の質が根本的に変わらなければ空しいのである。ここに魂と肉体の調和を生理的・心理的営みの次元からみる眼がある。この文脈の“life”には、命、人生、生活のいずれの含みもあって、言葉の選択の鋭さゆえに豊かな曖昧性が宿っている。

語り手は、クレスマーの厳しい言葉が残酷なように見えて、その動機に深い憐れみがあることに触れている。その真意を、一般論めかして語る。

Our speech even when we are most single-minded can never take its line absolutely from one impulse; but Klesmer's was as far as possible directed by compassion for poor Gwendolen's ignorant eagerness to enter on a course of which he saw all the miserable details with a definiteness which he could not if he would have conveyed to her mind. (23: 238-39)

ゲエンドレンが無知な情熱に任せて突っ走ればどんな結果が待ち受けているか、クレスマーには見えている。相手がみすみす苦しみを招くような行為を見ていられない、というのが彼の意識に浮かんでいる思いである。ところが、言葉の表層的な意図の背後に無意識の層が隠れている。それはユダヤ人としての血の宿命がかかわっている。言葉を語るほどに、心の奥底から屈辱と忍苦が思い出されてくる。本人の意識のみではあずかり知れない民族の体験と絆が言葉に乗り移ってくるのだ。ここに、意識から無意識へと連なる心 (psyche) の氷山が人を動かす力として想定されている。言葉が生理的基盤を持ちつつ、体験と記憶と深く絡みあっている。

エリオットの言語観には伴侶ルイス (Lewes) と長年共有した「心の生理的基盤」³の問題意識がある。“living words fed with the blood of relevant meaning, and made musical by the continual intercommunication of sensibility and thought.” (“Notes on Form in Art” 359) 感受性と思考が相照らしあって、意味が身体的レベルで会得されたとき、言葉は生きたものとなるという。意味の血流のイメージは、言葉を心身の生理的・心理的営みの一環とみる有機的生命観の表現である。この問題意識がDDの性格描写に深い陰影を与える所以である。

Ⅲ. 結婚が教える見かけと現実の落差

グランドコートとの結婚は、ゲエンドレンには眼の前の困難を回避し、身の安泰と世間的な栄誉を得る唯一の方便だと感じられた。ところが結婚7週間にして早くも、彼女は新しいくびきが、喜びと希望ではなく絶望と苦しみをもたらすことを悟った。二人の子どもを抱えた内縁の先妻の、自分にたいする呪詛の言葉は彼女の内心に毒をめぐらし、喜びの種を摘みとったのだ。他人を犠牲にして得た幸福たるべき身分が蟻地獄の苦しみとなったのである。⁴ 夫の身持ちの悪さを知りつつ、あえて打算から結婚を決断した事実は夫に知られてはならないという思いがあった。(読者は、グランドコートが、妻の真の動機と事実関係を知り抜いて結婚したことを知らされるのだが) 内心の失望と苦衷を夫に悟られる屈辱に堪えられないのだ。夫がどのような人間性を見せるにせよ、品位をもってくびきを背負おう、憐れみをかけられてはならない。この自尊心がひたすら体面を取り繕う意思の努力を支えていた。

Gwendolen's will had seemed imperious in its small girlish sway; but it was a will of the

creature with a large discourse of imaginative fears: a shadow would have been enough to relax its hold. And she had found a will like that of crab or a boa-constrictor which goes on pinching or crushing without alarm at thunder. (35: 394)

ここに、独身時代の夢が結婚生活の現実にとって替えられた境遇の激変が集約されている。「視野の狭い、娘の支配」の終わりはあっけなくやってきた。ゲエンドレンが信じて疑わなかった自由意志は、幻のようにはかないものだったのである。“a large discourse of imaginative fears” 自己という存在は危うい基盤のうえに成り立っている。おのれという核を中心にものごとを見ると、憶測や猜疑や不安が果てしなく湧いてくる。自己執着の妄念が現実認識の眼を曇らせるのだ。人の心を迷わせるからくりは、当人には見えなくても働いている。人の心には自己中心性の闇がある。“a large discourse” は、恐れと不安が現実を踏み越えて独り歩きするさまを鮮やかに視覚化している。影が差しただけで意思が萎えてゆく絵画的イメージは、蟹と大蛇の締めつける画像と相まって、ヒロインの精神状況を直感させる想像的な筆致である。みずから正体を掴むこともできない闇の感情に原初的言葉を読みとる想像力は、作家の姿勢そのものから湧き出したものである。人間探求は、そのまま言葉の探求へと通じているのである。⁵

夫グランドコートとの深い断絶は、ゲエンドレンの心中に微妙な変化を生じていた。型通りにレディの役割を演じる彼女には、世間に向けた自己のイメージと真の自己との間に生じる深刻な乖離が起こっていた。それが典型的に表れるのが教会生活であった。貴族の一家は教会のパトロンとして宗教共同体の健全性を守り育てる要の役割を期待されている。しかし、信仰は個人の内面生活に深くかかわる問題である。外からあてがわれた務めを無難にこなすレベルで済む話ではない。教会の儀式典礼に従うゲエンドレンの心境に、語り手は理解と憐れみのまなざしを向けている。結婚後最初の冬が過ぎ、はや春が初夏に移ろうころ、彼女の取り繕いの暮らしは惰性に流され、かつての澁刺たる面影はなかった。

Church was not⁶ markedly distinguished in her mind from the other forms of self-presentation, for marriage had included no instruction that enabled her to connect liturgy and sermon with any larger order of the world than that of unexplained and perhaps inexplicable social

fashions. While a laudable zeal was laboring to carry the light of spiritual law up the alleys where law is chiefly known as the policeman, the brilliant Mrs Grandcourt, condescending a little to a fashionable Rector and conscious of a feminine advantage over a learned Dean, was, so far as pastoral care and religious fellowship were concerned, in as complete a solitude as a man in a lighthouse. (48: 562)

ヒロインの精神の停滞を描くこの一節には、語り手の背後の作家がみた教会生活の本来の意味が示唆されている。その裏表を見てきたエリオットの炯眼が達意の言葉に奥行を与えている。否定表現が目立つのは、教会生活のあるべき姿が想定され、これに照らしてグエンドレンの現実が宗教の本来性を喪失していることを浮き彫りにする文脈の趣旨に沿っているからである。

彼女の眼には、礼拝の「典礼式文と説教」は「社交儀礼」に従う以上の意味はないのである。“larger order of the world”は現世さらには宇宙の秩序であって、キリストの体たる教会がその先達によって伝承してきた知恵の結晶である。これに聞き耳を立てて謙遜に学ぶところに、個人が生きる糧を得る宗教的叡智がある。“no instruction”という凝縮された抽象語句は、聖書の伝承されてきた言葉を隣人とともに味わい、同朋意識を深める感受性が欠けていることを示している。次の文の“while”節にはイングランドの宗教史が刻み込まれている。国教会と非国教会派（Nonconformism）が住み分ける宗教体制の二重構造である。「裏路地」は産業都市の片隅の職工が住む長屋の暮らしを偲ばせる。19世紀初頭、信仰復活運動は、それ以前には信仰の光に浴しなかった（“law”といえは警察権力を想起するような）下層の民衆に広まった。語り手は、「霊的な律法」が伝道者によって伝えられた歴史的事実⁷にそっと言及しているのである。福音伝道主義のもつ平民主義、（神の前に人は等しく罪人たることにおいて平等であるとみる観点）とハイ・チャーチの身分序列を基盤とする伝統秩序が対置されている。そのような歴史的な文脈にグエンドレンの住む世界が位置づけられているのである。“condescending a little to a fashionable Rector and conscious of a feminine advantage over a learned Dean” “condescending”には、彼女が身分の高い教区牧師に謙遜な振る舞いをする含みもあれば、身分的な高みから見下ろす慙懃の含みもある。「学問のある地方執事」がレディに敬意を表するのを優雅に応じる物腰も、彼女を

取り巻く風土を象徴する点描である。「教区民のお世話」と「宗教的同朋意識」において、燈台守のような光の足許の孤独な闇を味わうヒロインの内的風景は、さらりとした点描の域を超える洞察的な風土描写である。

この場面が続いて、語り手が読者に問いかけるような論評がみられる。

Can we wonder at the practical submission which hid her constructive rebellion? The combination is common enough, as we know from the number of persons who make us aware of it in their own case by a clamorous unwearied statement of the reasons against their submitting to a situation which, on inquiry, we discover to be the least disagreeable within their reach. Poor Gwendolen had both too much and too little mental power and dignity to make herself exceptional. No wonder that Deronda now marked some hardening in a look and manner which were schooled daily to the suppression of feeling. (48: 562)

宗教が知恵として人の暮らしに生きるとはどういうことか、という問いがここにある。儀式・典礼の言葉と音楽には人と人をつなぐ縁がある。言葉が言葉になって魂に語りかけ、オルガンの荘重な調べと讚美歌の斉唱は聴く人の心に感情の昂揚をもたらす。小さな自己を捨てて、大きな世界におのれを投げ出すと心の安らぎが訪れる。これが宗教生活の命であり、詩である。家族とともに幼いころから国教会の礼拝に参列していたエリオットは、このことを全身全霊で知っていた。

この場面に見られるヒロインの孤独地獄は深い。讚美歌の宗教詩は、現世執着に囚われた心には感情の昂揚をもたらしはしない。慣習に表面的に従いつつ、心は離反している。心を武装解除して素直になればおのずから湧き上がる共感の上げ潮も執着心で枯渇している。道理に服する感受性がないときに、これに抗う理屈は何とでもつく。だが、声高に理由を申し立てる人の心根を吟味してみると、自分にとって心地よくないことを避けたいという思惑が知れてくるのだ。語り手のまなざしは、自分の本当の動機を知らず、世間的な思惑から粉飾としての言葉を弄する人間の迷いを見据えている。“Poor Gwendolen had both too much and too little mental power and dignity to make herself exceptional.” この一文の含

みは曖昧微妙である。意味の奥行が玉虫色になっている。グエンドレンは、本当の自己を言葉で粉飾する意味で、世間でよく見かける人の例外ではない。その「知力と品位」は世渡りのはからいにはたけているが、「主を恐れる心」の純一さからみると闇夜をさまよっているのである。“No wonder”以降の文は、視点が語り手からデロンダに移っている。彼女の心の奥底に注意を払っている彼にはひらめきがあった。物腰とまなざしに、感情を抑圧している人に固有の無感動が見られたのである。

教会生活をめぐるグエンドレンの心理描写には、作家のロマン派的な感受性が反映している。これを端的に言えば、言葉と行動と感受性が融合して相互に照らしあう境地にたいするあくなき模索とによってよい。習慣に安住すると命の充足感はかげろうのように去る。宗教的感動の瑞々しい流れが涸れると、後に残るものは形骸化した教義体系と儀式的形式主義のみである。作家のこの感受性は、福音主義へ傾倒していた少女期・青春期以降一貫して変わることがない個性であった。

The idea of a God who not only sympathizes with all we feel and endure for our fellow-men, but who will pour new life into our too languid love, and give firmness to our vacillating purpose, is an extension and multiplication of the effects produced by human sympathy; (“Evangelical Teaching: Dr Cumming” 168-69)

人が人に寄せる共感、とりわけ他者の苦しみと悲しみをわがことのように受けとめる感受性は、人を神に近づける道であるという。人に生来的に備わった共感の力を磨きあげてゆくと、すべてを見通し、すべてを理解し、すべてを赦す存在が心に生きてくる。この見方はエリオットの小説世界に貫かれている。このような共感の神に照らしてグエンドレンの苦しみも凝視されているのである。宗教は自己の囚われを洗い流してくれる感情である。こう観じる作家は、因習に縛られたヒロインの闇を否定的にあぶり出すことによって、この体験的真実を浮き彫りにしているのである。

IV. 導きと帰依

結婚生活の生き地獄に苦悩するグエンドレンのあるがままの姿に寄り添い、導きの光となるデロンダのプロットは作品の後半で繰り返し表れ、主調音を奏でている。(35章, 36章, 54章, 64章)それはすでに触れたように、作家自身の精神遍歴を色濃く反

映している。⁸一寸先は闇の人生を手探りすることは、恐れ、不安、自己不信と向き合うことに他ならない。このような否定的な感情を転じて共感と赦しと感謝へと昇華させる歩み、これがエリオットの作家人生に流れる枢要なテーマであった。この問題意識がグエンドレンとデロンダの対話に表白されているのである。

夫グランドコートとの不毛な暗闘に疲れ果て、恐れが憎しみへと変わってゆくさまが描かれる一節がある。

Passion is of the nature of seed, and finds nourishment within, tending to a predominance which determines all currents towards itself, and makes the whole life its tributary. And the intensest form of hatred is that rooted in fear, which compels to silence and drives vehemence into a constructive vindictiveness, (54: 626-27)

ここにも自然界の有機的暗喩 (organic metaphor) が使われている。植物の種が土壌に根をおろし、その栄養を吸収して成長するように、恐れも人間関係の土壌を糧に増殖する。恐れは言葉に表現されないままに心に食いこみ、憶測、猜疑心の養分を吸って憎しみへと姿を変える。感情に水の流れの暗喩を使うのはエリオットの生理学・心理学の知見を反映している。その観点に立てば、人の感情は先験的な善悪の観念によって弁別されるものではなく、自然の営みのなかで善にもなれば悪にもなるものとして相対化される。⁹ 命を枯らす感情の水路は支流と合流し、水位を上げてゆく。気がついてみると、否定的感情は心身を圧倒して、人と人との共感の絆を掘り崩してしまう。水流が自然法則に従うように、感情にも法則に則った動きがある。このプロセスとメカニズムを知ることが否定的感情の圧政から自由になって、命の充足に導かれる所以となる。

グエンドレンのなかで現実との接点が縮小すればするほど、自己卑下、猜疑心、心細さが心を占領し、病的自意識が昂じてくる。世間に対して身構えれば身構えるほど精神は金縛りにあい、神経はずたずたに引き裂かれるのだ。この期に及ぶとすべては行き詰まり、体面を取り繕うことすら難しくなる。ただただ、この袋小路を脱する一縷の望みを託して、信頼できる他者に自分のあさましい姿をさながらに投げだすほかはなくなるのだ。

I am selfish. I have never thought much of any

one's feelings, except my mother's. I have not been fond of people. — But what can I do? . . . the world is all confusion to me . . . You say I am ignorant. But what is the good of trying to know more, unless life were worth more? (36: 420)

グエンドレンがデロンダに心の叫びを吐露した瞬間である。自分より深い境地をもった人に一切合財を投げだし、自己の真の問題を見てもらうことは、そのまま絶対者に向かって自己を放棄することになるのだ。自己を捨てること自体に自己喪失の病を癒す治癒力が秘められているのだ。それは人間の本然的な欲求であって、宗教心の芽生えともいえるものである。自己をさながらに投げださずにはおれなくする力は、人間が本来的にもっている純な魂から出てくるのだ。「私は利己的な人間なの。結局人間が好きになれなかったのね。 . . . 私に何ができるかしら。」¹⁰この言葉は、捨てがたい自尊心を捨てた人間からほとぼしる純粋な言葉である。そこにはすでに、己のあり方を問い直し、道理に耳を傾ける真の自己が兆している。

グエンドレンが変化する予兆を感じたデロンダは、諄々と論ずるのである。

“We should stamp every possible world with the flatness of our own inanity — which is necessarily impious, without faith or fellowship. The refuge you are needing from personal trouble is the higher, the religious life, which holds an enthusiasm for something more than our own appetites and vanities. The few may find themselves in it simply by an elevation of feeling; but for us who have to struggle for our wisdom, the higher life must be a region in which the affections are clad with knowledge. . . . Take the present suffering as a painful letting in of light, . . . Take your fear as a safeguard. It is like quickness of hearing. It may make consequences passionately present to you. Try to take hold of your sensibility, and use it as if it were a faculty, like vision.” (36: 421-22)

ここにみえる作家のヴィジョンには、根底に人間は罪人であるとみる人間観がある。自分を位置づける視野と共感が欠けると人の感情はよどみ、命の充足とは裏腹な自己執着へと陥る。自己への囚われが

あると生きる意味を見失い、ものを見る眼が曇り、すべてが空しく感じられる。この隘路を突破する道は、自己を捨てて、これを超えた何かに情熱を注ぎこむことである。自己を忘れて精進すると、おのずから隣人との共感と命の充足が訪れる。これが「より高い暮らし」の意味あいである。苦しみは避けがたいものであって、これを受けいれ忍耐すると、そこから新しい見方が開けてくる。因果の道理 (consequences) がありありと眼に浮かぶように見えてくる。ものを「鋭敏な耳で聞き」、あるがままに「見る」ためには、「感受性」を研ぎ澄ますことが問われる。これは、作家のなかに深く息づくロマン派的な感受性の表現である。おのれを空しくして心の眼を見開き、耳を傾けると、命の神秘の囁きが聞こえてくる。

上記の一節には作家が辿りついた境地が「より高い暮らし」の語句に凝縮されて表現されている。ノープフルマッカー (Knoepflmacher) によれば、エリオットが小説に仮託した境地は、19世紀後半の進化論の宇宙観と古い信仰の真実を和解させる試みだという。(5) また、シャトルワース (Shuttleworth) によれば、*DD*の主要人物の内的矛盾・葛藤の心理描写にはナチュラル・ヒストリーの発想とともに、実験科学の仮説・検証の方法が生きているという。プロットが仮説の性質を帯び、人物の心身の動きを環境との相互依存の相においてダイナミックに捉えるまなざしがあるという。(22) エリオットは、進化論の生命進化プロセスの真実性を受け入れつつ、心底に古い信仰の詩を宿していた。この矛盾に堪えて小説の言語を模索した。テキストの隅々に生理学・心理学の言葉とキリスト教の古い言葉が共存し、せめぎあっているのは、彼女の精神遍歴をおのずから映し出しているからに他ならない。

物語の大団円近くでグエンドレンとデロンダの関係が微妙に変化するプロセスが描かれている。(64章, 65章) ロマンティックな思慕と宗教的導きが一体化したデロンダのイメージが、彼女のなかで質的变化を遂げたのである。彼のマイラとの結婚と、パレスティナ行きの決意が堅いことを見てとったグエンドレンは、悲しい心の整理を迫られた。自分にとって命のような存在を諦める覚悟が芽生えたとき、彼女のなかにデロンダの人間性がより深く根付き、内面化したのである。心のなかで大切な人が生きて、その生きざまが自分自身の声となる心理を、語り手は「外なる良心」と呼ぶ。

It is hard to say how much we could forgive ourselves if we are secure from judgment by

another whose opinion is the breathing-medium of all our joy — who brings to us with close pressure and immediate sequence that judgment of the Invisible and Universal which self-flattery and the world's tolerance would easily melt and disperse. In this way our brother may be in the stead of God to us, and his opinion which has pierced even to the joints and marrow, may be our virtue in the making. (64: 709)

人の心のなかで慈悲深い隣人が「神の代理人」役を果たすことがある。その人のまなざしが自分を隈なく見つめている。自分のなかに自分ならざる存在が住み、心の対話が起こってくる。これは人間の姿をとった神の一人子イエス・キリストを心に招き入れるシンボリズムの継承である。「眼に見えない、遍在するものの審判」がありありと「因果のつながり」(sequence) のイメージを思い起こさせるとき、人の心には変化が兆してくる。自己を捨ててものを見ると、宇宙・自然に内在する道理が生きていることが知れる。自己の内に他者との対話があつて、それがあるがままの自己を映し出す鏡となる。

これは、すべてを見通す眼に導かれて生きるパウロの境地を偲ばせる。

The word of God is alive and active. It cuts more keenly than any two-edged sword, piercing so deeply that it divides soul and spirit, joints and marrow; it discriminates among the purposes and thoughts of the heart. Nothing in creation can hide from him; everything lies bare and exposed to the eyes of him to whom we must render account. (Hebrews 4: 12-3)

宇宙・自然に神の御言が生きているとみるパウロの言葉は、「主を恐れる心が知恵のはじまり」(詩篇 111:10) とみる旧約詩人の見方を継承したものである。上記引用の「眼に見えない、遍在するものの審判」に見られるエリオットの見方も、この延長線上にある。“piercing . . . joints and marrow” の語句に見えるように、彼女の心底には聖書の言葉が伏流していて、何かに触発されればいつでも心の地表に湧きだしてくる。「神のすべてを見通す眼」が働くところに、人は「説明を求められ、責任を問われる」(render account) のである。人間の行動とその動機を絶対者のまなざしで凝視する姿勢と、宇宙・自然を統合する力ないしは法則が働いているという認識¹¹ は、

ヘブライ詩人の精神の継承者たるエリオットを証している。

V. 結び

エリオットはヘブライズムを受け継ぐ一方で、聖書の神話と奇蹟を額面通りに解釈する愚を見通していた。神話は、古代人の詩的真實の証として文化人類学的解釈になじむと考えた。¹² 引用 (709) にある“another whose opinion is the breathing-medium of all our joy” という語句は、自然と、その一部たる人間の内面的な営みにアナロジー (異質な現象の間に同じ道理ないしは働きを見る眼) を認める見方から出たものである。“breathing-medium” は「生きた仲介者」の含みがあると同時に、生物にとっての環境としての空気の暗示もある。自己の内に生きる他者の存在が、環境との相互依存に生きる人間に働きかけ、喜び (生の充足) の基となるという。“the Invisible and Universal” の言い回しも宇宙・自然に内在する神秘的な働きを想起させる。肉なる人間の精神的な営みもその一環であるとみる感受性が言わせた発想である。

デイヴィス (Davis) によれば、ダーウィン (Darwin) とその同時代人は、人間の心を物質界の一部と捉える視野を獲得した。肉なる人間が、生理的な働きによって環境と他の生物と相互依存している側面に注目が集まった。これが心の捉え方に根本的な視座の転換をもたらしたという。(4-5) このような時代思潮に照らして、ドーリン (Dolin) はいう。エリオットの人道主義は、キリスト教がその基盤にある。過去の文化的伝統に敬いの念を抱きながら、キリスト教文化を進歩する科学発見の時代にふさわしい器に铸なおそうとした。心情に信仰の詩を抱きながら、合理的思惟の凝視に堪えないキリスト教の迷信を捨て去って、新しい時代の要請に沿った宗教のあり方を模索したと。(167) エリオットはいう。「至高の召命と選びは阿片を捨てて、あらゆる苦痛を意識的な、澄明な忍耐をもって生き抜くこと」である。(Letters III. 366) 苦しみと悲しみの体験は人間を変える霊薬であるとみる聖書的な見方は、実験科学の仮説・検証の方法によりダイナミックに捉えられることになった。「より高い暮らし」は、作家がデロンダに仮託して表明した、彼女自身の矛盾を止揚する境地を反映している。

注

1. Levine はいう。Gwendolen はおのれの自由意志ではどうにもならない不可抗力に遭って、自己の小ささを悟るという意味において、作家の体験

- を反映しているという。(42-3) (人名, 書名は注のみ原綴りで示す)
2. テキストからの引用は, 章と頁数を括弧内に示す。以下, 同様。
 3. EliotはLewesの生理学研究の問題意識を生涯共有していた。George Henry Lewes. *Physical Basis of Mind*. London: Trübner. & Co, 1877; Shuttleworth (Preface xi-xii)
 4. 道徳的因果律を自然法則の延長線上に認める見方は, EliotがSpinozaと歴史主義的聖書批評 (German Higher Criticism) から学んだ遺産である。Adam Bede (1858) “Consequences are un pitying. Our deeds carry their terrible consequences, quite apart from any fluctuations that went before — consequences that are hardly ever confined to ourselves.” (16: 168)
 5. 人間性もその一部に含む “nature” に言葉ないしは思索が内在するとみる観点は, すでにAdam Bedeにも表れている。これは, Eliotがロマン派詩人とGerman Higher Criticismの遺産を継承していることを物語っている。“Nature has her language, and she is not un veracious; but we don’t know all the intricacies of her syntax just yet, and in a hasty reading we may happen to extract the very opposite of her real meaning.” (15: 150)
 6. 否定語には下線を, 否定的な含みをもつ言葉には網かけを, 施している。
 7. Trevelyanによれば, Englandでは宗教体制が因習化すると改革運動が起こるパターンがあり, 19世紀初頭のEvangelicalismの信仰復活運動もこのパターンの例に漏れない。非国教会派もこの運動によって命脈を長らえたという。(434-35)
 8. Eliotは小説の執筆におのれのありったけの命を注ぎこんだ。Haight (321) これが心身に負担をかけ, 疲労困憊した。そんな折に不安と自己不信に陥ったことが書簡集のここかしこに見られる。誇り高さゆえに世間の作品批評を恐れる病的繊細さを痛々しいまでに自覚していた。Ashton (72-3; 164-65); Haight (337-39; 368-69)
 9. Knoepflmacherによれば, 被造物は遺伝と環境の産物であり, 時の流れのなかで絶えず変化するとみる進化論は価値の相対性に裏づけを与えたという。(18-9)
 10. この言葉は, *The Pilgrim’s Progress*の冒頭で主人公Christianが発する “What shall I do?” と相通じている。それは, 絶対者に向けて己のあり方を問う求道的な問にほかならない。Bunyan (8)
 11. Eliotは1851年に, German Higher Criticismの

意義に触れている。一神教の神は, 宇宙・自然に統合する力の存在を観たヘブライ詩人の原初的直観が生み出したものであると。“R. W. Mackay’s *The Progress of Intellect*” (28)

12. Willeyによれば, EliotがGerman Higher Criticismから学んだユダヤ教・キリスト教神話の意味は, それが古代人の宗教的体験の反映であり, 心の真実が宿っているということだったという。(224)

Works Cited

- Ashton, Rosemary. *George Eliot: A Life*. St. Ives: Penguin Books, 1997.
- Beer, Gillian. *Darwin’s Plots*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Bunyan, John. *The Pilgrim’s Progress*. Element. Rockport: 1997.
- Cogan, Donald. Ed. *The Revised English Bible*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Davis, Michael. *George Eliot and Nineteenth-Century Psychology: Exploring the Unmapped Country*. London: Ashgate, 2006.
- Dolin, Tim. *George Eliot*. Oxford: Oxford UP, 2005.
- Eliot, George. “R. W. Mackay’s *The Progress of Intellect*.” *George Eliot Selected Critical Writings*. Ed. Rosemary Ashton. Oxford: Oxford UP, 1992. 18-36.
- . “Evangelical Teaching: Dr Cumming.” Ed. Rosemary Ashton. 138-70.
- . “Notes on Form in Art.” Ed. Rosemary Ashton. 355-59.
- . *Letters*. Vol. III. Ed. Gordon S. Haight. New Heaven: Yale UP; London: Oxford UP, 1955.
- . *Adam Bede*. Ed. Robert Speaight. London: Everyman’s Library, 1973.
- . *Middlemarch*. Ed. and introd. A. S. Byatt. New York: Oxford UP, 1999.
- . *Daniel Deronda*. Ed. and introd. Graham Handley. Oxford: Clarendon Press, 1984.
- Haight, Gordon S. *George Eliot: A Biography*. Oxford: Oxford UP, 1978.
- James, Henry. “*Daniel Deronda: A Conversation*” *Atlantic Monthly*. (December 1876) David Carroll. Ed. *George Eliot: The Critical Heritage*. New York: Barnes & Noble, 1971.
- Knoepflmacher, U. C. *Religious Humanism and the Victorian Novel: George Eliot, Walter Pater, and*

- Samuel Butler*. Princeton: Princeton UP, 1965.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition: George Eliot Henry James Joseph Conrad*. St Ives: Penguin Books. 1993.
- Levine, George. *Realism, Ethics and Secularism: Essays on Victorian Literature and Science*. Cambridge: Cambridge UP. 2008.
- Shuttleworth, Sally. *George Eliot and Nineteenth-Century Science: The Make-Believe of a Beginning*. Cambridge: Cambridge UP. 1984.
- Trevelyan, G. M. *English Social History: A Survey of Six Centuries from Chaucer to Queen Victoria*. London: Longman, 1978.
- Willey, Basil. *Nineteenth Century Studies: Coleridge to Matthew Arnold*. Cambridge: Cambridge UP. 1980.

